



龍雲盛付達磨型大花瓶（高59.0×口径21.0×底径22.0）

新収蔵品紹介

島袋常雄作 『龍雲盛付達磨型大花瓶』

今回紹介する花瓶は、製作者の島袋常雄氏が半胴型甕（1点）とともに寄贈されたものです。

作者の島袋氏は、40数年もの間荒焼一筋に歩んできた陶工で、作品は昭和54年に製作した大型の花瓶です。

この「龍雲盛付達磨型大花瓶」は珍しい達磨型の壺に龍を巻付けたものです。火炎宝珠を中心に龍を右回りに施してありますが、この技法を、壺屋では盛付けと呼んでいます。浮彫のようなものと異なり、立体的な表現が可能で、それだけに難しい技法のひとつです。

この作品は氏の独特な焼き方が表れており、古い型にとらわれず、創作的な意欲が伺えます。

島袋氏は尋常小学校・高等科卒業と同時に祖父・常栄に師事し、荒焼製作に従事します。戦後、いち早く壺屋陶器の復興に参加。昭和21年、沖縄陶器株式会社設立にあたり、その一員として尽力されました。

氏は荒焼の伝統を引き継ぎながら、一方では作業工程の簡略化・窯の効率化などの事業を行い、現在荒焼の指導者として活躍しています。

## 『大アンデス文明展』盛況のうちに終了

1月23日（火）から2月24日（土）まで開催された特別展「大アンデス文明展～よみがえる太陽の帝国インカ～」は67,666人の参観者を迎え、盛況のうちに幕を閉じました。外国の文化を紹介する展覧会で7万人近い参観者があったということは、アンデス文明（特にインカ帝国）に対する関心の高さでしょう。

今回の展覧会にはペルー共和国の5つの主要博物館から約700点の文化財が一堂に集められました。このようにスケールの大きなアンデス文明展はおそらく今後開くことはできないであろうと言われていました。

この展覧会は、大人はもちろんのこと、特に児童生徒の見学を期待しました。それは、ほかの国の文化に直接せつすることにより広く視野を広げる絶好の機会であり、また感受性の強い児童生徒にとって説明なしで、楽しみながら理解できるものと思われました。そのために全職員がポスターやチラシを持って本島内の全小中学校をくまなく巡りました。時期的なことあって、学校の団体見学30校でしたが、親子連れが多く、結果的には3万人近い児童生徒が見学しました。親子連れの

観覧者が土・日に集中したため、混雑してしまいました。特に最後の日曜日と最終日の土曜は7千人を超える参観者を記録しました。

見学後、926点の感想文が寄せられました。その多くは「すばらしかった。！感動した！。アンデスへ行ってみたい！」などという感動で綴られていました。最も感動したのは「母と子のミイラ」と「黄金ジャガー頭」であったようです。そのつぎにカエル・ヘビ・ピーナッツ人・あし舟にのった人・よっぱらい人などの土器、色とりどりのトウモロコシ、2千年前の色鮮やか織物などでした。



### 大アンデス展の感想文

松本尚子さん（石嶺中学校1年）

私は、大アンデス展を見学して、一番印象に残ったことは、親子のミイラでした。はじめはつくり物だと思っていたミイラでも、本当に、本物だと思ったときは、とてもびっくりしました。本当に、ここにかざられているミイラは、何千年か前までは、私たちと同じように、言葉をはなし、あの足で大地を歩いていたと思うととてもふくざつな気もちになりました。そして、不思議に思ったのは、あんなに時がたったのに、くずれていないことでした。そして思ったことは、これから世界のいろいろな文化を勉強したいと思います。

宜野座 恵さん（中原小5年）

アンデス文明展をみて、インカ帝国というのは、昔から今の日本のようにさかえていた。あんなかたい石をどうやってほって、つぼをつくるんだろう？ どこから、あんな、金をもってくるんだろう？とか、なぞがいっぱいあるけど、スペインにほろぼされてしまって、今はない。でも、もし、インカ帝国が今もさかえていたら、どういう国だったんだろう。そして、今の文明よりも、もっと進歩して、世界で1番、すごい国だったかもしれない。

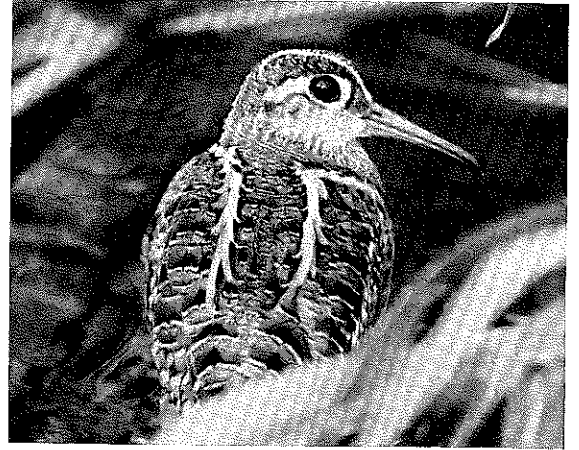
平成2年度の企画展のお知らせ

『沖繩の野鳥』

会 期：8月16日（木）～9月2日（日）

会 場：企画展示室

沖縄にはどのくらいの野鳥がいるだろう？。自然の中で野鳥はどんなはたらきをしているのだろうか？。そんな疑問に答えるような展示会が、いよいよ登場します。この企画展「沖縄の野鳥」では、沖縄の留鳥（沖縄で一生を過ごす鳥のこと）や代表的な渡り鳥について、実物標本や写真パネルで紹介いたします。あわせて沖縄のユニークな野鳥相の特徴、貴重な野鳥が生き残ってきた原因などについても分かりやすく解説します。また、代表的な鳥の仲間、一般には少し判別にとまどう野鳥（例えばサギ類）について、その形態的な特徴や見分け方などを実物標本をもとに解説するコーナーもあります。



タマシギ

\*\*\*\*\*

『沖繩の祭り』

会 期：11月1日（木）～11月25日（日）

会 場：企画展示室

祭りは、時代とともに変容しており、その時々の人々の生活や信仰が形として表れているのではないのでしょうか。県内各地では、今なお数多くの祭りが行われており、私たちの生活のなかで祭りは欠くことのできないものです。

この展示会では、私たちの生活とのかかわりのなかで祭りとはなにかを考えて見ようと思います。

展示は、楽器や衣装などの現物資料と各地で行われている祭りの写真パネル、実際使用された綱引の綱などがあります。また、ビデオや16mm映画も放映します。

なお、この展示会の資料は、平成元年に実施した生涯教育推進事業「沖縄の祭り」の成果に基づくものです。

『技と美—大城志津子の世界—展』

会期：平成3年2月5日（火）～2月17日（日）

会場：企画展示室

古くから沖縄は織物の盛んな地域で、いろいろな織物が作られてきました。戦後、伝統的な工芸品の存続が危ぶまれましたが、多くの人々によって見事に復興しました。大城志津子氏もその一人でした。

大城氏は、琉球大学や県立芸大において後進の指導をするとともに、氏自身でも長年沖縄の織物を研究していました。伝統的な技法は勿論のことそれを踏まえて新たな織物への挑戦も続け、独自の世界を築き上げました。しかし、平成元年、4月29日、病気療養中のところ他界されました。

今回展示する織物は、氏の遺言にそって当館に寄贈されたもので、氏の軌跡を知るには絶好の機会であるとともに戦後沖縄の織物の歩みの一端を知る貴重な資料と言えるでしょう。

平成2年度博物館文化講座のご案内

※ ●はすでに終了した講座です。

●第190回『グスクの見方・調べ方』

日時 4月28日(土) PM2:30~PM4:30  
 講師 当真嗣一(当館主幹)  
 内容 グスクの縄張について、OHPやスライドを用いて解説する。

●第189回『宮古の歌謡』

日時 5月19日(土) PM2:30~PM4:30  
 講師 新里幸昭(中部商業高校)  
 内容 宮古・狩俣の祭祀歌謡を中心に、録音のテープを用いて解説する。

●第188回『選挙制度を通して見た沖縄戦後史』

日時 6月16日(土) PM2:30~PM4:30  
 講師 波平常則(西原町役場)  
 内容 戦後の米軍統治下における選挙制度をとおして沖縄の戦後史をあとづける。

●第191回『清水貝塚の発掘成果』

—主に貝製品について—  
 日時 7月21日(土) PM2:30~PM4:30  
 講師 盛本 勲(文化課専門員)  
 久米島清水貝塚の発掘成果をスライドを使いながら分かりやすく解説する。

第192回スライドウォッチング『沖縄の野鳥』

日時 8月11日(土) PM2:30~PM4:30  
 講師 嵩原建二(文化課専門員)  
 県内で見られる野鳥たちをきれいなスライドで紹介する。

第193回収藏品解説会『花織』

日時 9月22日(土) PM2:30~PM4:30  
 講師 祝嶺恭子(県立芸大助教授)  
 当館収蔵の織物のなかから「花織」を選び、実物を見ながら解説する。

第194回『灰釉碗の話』

日時 10月20日(土) PM2:30~PM4:30  
 講師 池田栄史(琉大法文学部助教授)  
 「灰釉碗」をとおして沖縄陶器の歴史を実物を見ながら解説する。

第195回『沖縄の祭り』

日時 11月3日(土) PM2:30~PM4:30  
 講師 崎原恒新(中城中学校教諭)  
 県内各地の祭りについて、スライドを見ながら分かりやすく解説する。

第196回親子民具教室『凧づくり』

日時 12月2日(土) AM10:00~PM3:00  
 講師 外原 淳(沖縄玩具伝承友の会主宰)  
 内容 竹・紙・のり・ひもなど身近にあるものを使い沖縄の凧を作る。

第197回『ヤモリあれこれ』

日時 平成3年1月19日(土) PM2:30~PM4:30  
 講師 太田英利(琉大理学部)  
 内容 沖縄にすんでいるヤモリを中心にヤモリの不思議な生態を紹介する。

第198回展示解説会『大城志津子の世界』

日時 2月9日(土) PM2:30~PM4:30  
 講師 多和田淑子(染織家)  
 内容 故・大城志津子の作品と生涯について展示物を見ながら解説する。

第199回『掘り出された北谷グスク』

日時 3月16日(土) PM2:30~PM4:30  
 講師 中村 愿(北谷町教育委員会)  
 北谷グスクから掘り出された遺物・遺構について、スライドを使い解説する。

文化講座への問い合わせ

案内コーナー・☎(0988) 86-4492

— 展示準備のお知らせ —

当館では、8月16日(木)からはじまる企画展「沖縄の野鳥」の展示準備のため、下記の3日間2階企画展示を閉室いたします。

●期間・8月13日(月)~15日(水)

## 平成2年度新収蔵品展

博物館の資料は、寄贈・購入・収集によって年々充実しています。なかでも寄贈による資料は、毎年多く、自然・考古・歴史・美術工芸・民俗と多岐わたっています。

当館では、前年度に収蔵された資料を一堂に集め『新収蔵品展』を毎年、年度初めに開催しています。今年度は、4月24日(火)から5月13日(日)の期間、企画展示室において、約150点余り展示しました。

平成1年度の収蔵品は寄贈33件(1,159点)、購入17件(20点)ありました。分野別に見ると自然(1点)、美術工芸(1,114点)、歴史資料(4点)、民俗資料(40点)がありました。

寄贈された資料のなかには、リー夫妻から寄贈された「永福寺の鐘」(平成2年2月6日付け、県指定有形文化財に指定)や沖縄民政府表示板、ジュラルミン製洗面器などの現代資料も含まれています。



屋根獅子(宜野湾市 宮城善光氏寄贈)

その他、多くの資料は、博物館の展示・研究においてなくてはならないものばかりです。

なお、大城亀氏から寄贈された1,104点もの織物は、故大城志津子氏が生前製作した作品で、平成3年2月に企画展を開催いたします。

## 第14回移動博物館、北大東村に開催す！

今年度の移動博物館は、6月9日、10日の期間で北大東村において開催しました。会場は北大東村離島振興総合センターを使用し、約120点あまりの資料が展示されました。

移動博物館の準備は、5月22日の資料の梱包から行いましたが、天候悪化のため船便の欠航で北大東に資料が着いたのは6月4日になりました。



展示作業は、5日から各分野の担当の手によって進められました。

展示終了後、ただちにかたづけ作業にはいり展示資料が当館にもどってきたのが6月20日。資料の開梱と検査がおこなわれ、再び収蔵庫に納められました。わずか2日間の展示期間でしたが、全工程を終了するのに約1ヶ月間かかりました。

展示は自然、考古、歴史、美術工芸、民俗の各分野別に展示しましたが、特にマンモスなど恐竜に子供たちは驚嘆の声をあげていました。また、ダイトウオオコウモリなど自分たちの身近な動物にも興味をしめしていました。また、6月9日の午後2時より、琉球大学生物学科の宮城康一先生により「大東島の植物」と題した講演が行われました。講演会には104名の参加者がありました。

なお、展示会は、296名の入場者があり、北大東村の約60%の村民が参観したことになります。

**トピックス**

ハワイ『沖縄の染織展』

戦前、多くの県民が海外へ移住していきました。特にハワイへ移住した人々は第二次世界大戦などをへており、苦勞の連続だったと言われています。

今年はハワイへ移住してから90年になり、その記念事業として、ハワイでは数々の催しものが行われます。「OKAGESAMADE」と題されたこれらの事業は、ハワイで活躍した沖縄県民の思いがこめられています。

当館では、このハワイの90周年事業に賛同しホ

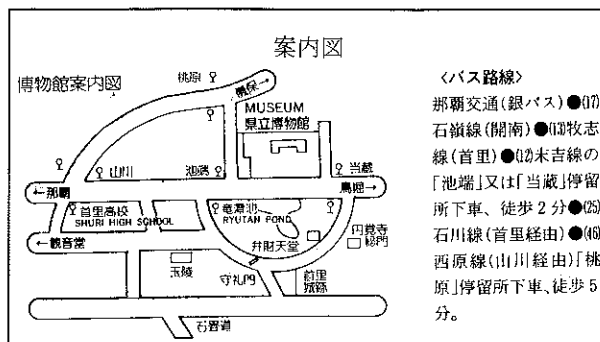
ノルル美術館において開催される「沖縄の染織展」に参加することになりました。この展示会は当館が収蔵する染織品のうち約50点を選抜し、展示するものです。海外で沖縄の染織品をこれだけ多く展示するのはおそらく初めてのことでしょう。また、8月には「世界のウチナーンチュ大会」も開催され、ますます沖縄の文化が世界で紹介されていくものと期待されています。

『龍柱』、装も新たに

昨年より、首里城正殿復元のため取り外されていた龍柱が3月2日に装も新たに返ってきました。以前は当館の正面玄関左側に設置されて、来館者を出迎えていました。しかし、長い間風雨にさらされていたため、保存管理の上から屋内に展示することになりました。

龍柱は、細粒性砂岩（ニーブヌフニー）で作られており、重さは推定500kgあるため台座の形状には特に注意を要しました。鉄骨で骨組みを作り、その周辺には、勝連産のトラバーチンを貼り巡らしてあります。

展示は、一階ロビーの首里城正殿模型の左側に設置され、当時の姿がうかがえるようになっています。



沖縄県立博物館だより No.30

発行年月日 平成2年7月31日

編集・発行 沖縄県立博物館

住 所 〒903 那覇市首里大中町1-1

TEL(0988) 84-2243

86-4353